



TITLE:

温泉めぐりのちみ草

AUTHOR(S):

---

CITATION:

温泉めぐりのちみ草. 地球 1924, 2(1): 281-289

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182684>

RIGHT:

三ヶ所あり。腫物、瘡毒、微病の類によし。これより三枚橋へ五町許あり。岨を歩みて橋の東爪へ出る。これより本道東海道なり。

(東海通名所圖會寛政九年版)

此の文は今から百二十八年前に著者の京都から江戸までの道中名所を採つた紀行の一節である。數年前に我々は久し振りで一寸と行つたが、山を掘り割り鐵道を敷き電車を通じて、登山電車が湯本から強羅まで開かれて、遊覽の便が

## 温泉めぐりのちみ草

### 一、箱 根

憶ひ起して面白いのは學生時代の草鞋旅行で旅屋で門前拂を喫つたのも忘れられぬ一興である。ある夏興津から降りて風祭塔ノ澤の安山岩をドウラン 未だリュッツザックは使はぬ時代であつた)に一杯詰めて重い足を引ずつて宮ノ下奈良屋の玄關に行つた時の箱根旅行は今も記憶に新たである。其時近年薨去された某元老夫人の義弟に當る同窓が黒モーニングで故夫人の三

出來た。されど民衆化して行くといふよりも低級な遊客が當時の世間の空景氣に浮かれた雜踏であつて、塔の澤の旅館で一夜の金く夢を結ぶことの出來ぬ喧噪に苦しんだ。其の後大地震で全潰れになつたといふ報を聞いて、寧ろ此の如き俗惡なもの、破壊が緊張した人心と共に新しく改造される氣運を成すべきを悦んだ譯である。復興した箱根の景況が如何であるかを知らぬ。(如丹)

太夫格で陪從して來て居たのに會つた。己れが談判してやると何時もの義俠を賣り物に半かちりの法學通論を振りまわす癖が幸で、番頭のお生憎様に承知せず、どうも、相宿で泊れた。

その相宿の客は徳川譜代の上州某の城主何代かの後裔某子爵で、とり卷きの老人と二人きりといふ氣樂な殿様で、書生の我輩と鼎坐して、氣焰萬丈の上機嫌であつたので、數日間八疊二間の座敷にのんびりと休んだ。毎朝同窓と夫人

の侍醫某醫學士と三人で温泉に入り、雑談する間に氣焰の高いあの殿様も貴族の血統によくある精神病者だと無暗に主張する専門家顔の話もあつた。然るに醫學士は開業後間もなく死に、同窓は外交官として手腕を認められるに至ると直ぐ死んだし、子爵も數年前に世を去られたと聞く。此の時の如く心置なく箱根に泊つたことがないから三人共に再び會えなくなつた今日一入故人を憶ひ出される。

「宮ノ下を中心として歩いた中に一生に一度の經驗を得たのが箱根の山駕であつた。大涌谷で硫汽坑の邊を傳ふて蘆の湯に向ふ途中に二人連の駕屋が同じ道を空駕を昇いて行くのど一處になつた。乗つて呉れど勧められたので、もう五十三次の駕のなくなつて二十幾年箱根でもアームチニアで外人を昇くの多くなつたのであるから一生に復た乗つてみる折もないと思つて、蘆の湯紀伊國屋までといふ約束で乗つた。七重の腰を八重に折つた苦しさも半時ばかりで、やがて蘆の湯につく二三町の處で駕屋は松阪屋に行

くと執念深く強請する。元來どつちでも郷里に縁がない名ではないが、紀伊國屋の方がなつかしい様に響き、且つ又た此奴道中の雲助の本性を現はして相手を見縊るといふ反抗心が起つたから、聲を荒らげて叱り飛ばし、問答二三分の後漸く我を折つて紀伊國屋の門前に下ろした。樓上に上つて挨拶に來た番頭に駕屋の話をした所が、けしからん奴だ、二軒の間に絶對に客引をせぬ約束があるから、駕屋の將來蘆ノ湯出入を差止めると怒るから、そんな事はとなだめて置いた。」

未だ日が高かつたので駒ヶ嶽に登る積で、案内者なしに飛び出した、初は小徑があつて辿れたが八合目で全く身長より高い茅の中に入つて方向も分らぬのに日が暮れたので斷念して下り其の晩は硫黃の湯垢の多い槽中に一浴して涼しい夢を結んだ。

翌朝蘆の湯から姥子に行つて湖水傳ひに箱根權現に詣つた。薄陰りの天氣で涼しいが濕つばいのに閉口して曾我兄弟と虎御前の五輪塔を見

たりして箱根宿に出て、羽生やといつたと記憶する維新以前の陣らしい宿屋に着いた。

此の時には氣がつかないが、豊後臼杵在深田の石佛を調べて、平家時代嘉應と承安の年號のある五輪塔に同地方石佛彫刻の年代を示す金石文を發見した。是で見ると箱根の曾我兄弟の五輪塔も形式全く臼杵のものそっくりで、復讐後に直ぐに誰かが此の供養塔を造つたことは明かである。

昔の本陣ではあつたがこの時は未だ避暑客も高等文官試験準備の學生もこの湖畔には殺到せぬから、草鞋掛けの高等中學生が廣い湖水に枕んだ座敷に通されて邯鄲黃梁の夢に等しい幻想を描いてゐられたのである。

澁茶一服の後野帳を出して觀察を記入してゐる處へ慌しく女中が來て駕屋が二人連れでは非面會したいといつてゐることで、又た昨日の性惡の雲助に惱まされるのかと思つたが、今度も頭から吐り付けて撃退せねばならぬと、直ぐ店先へ行つた。然るに想つたとは全くの裏表

で、側ふ様に板間に頭をつけての挨拶に一寸と面喰らつたが、聞けば紀伊國屋松坂屋兩家から蘆の湯出入差止めの嚴命で未來永劫立ち行かぬ大事件になつたから是非一筆紀伊國屋宛に赦免の手紙を書いて呉れとの嘆願で、昔の道中繪に見る通りの胸の邊に熊の毛の様に深く生へた男が羽生屋の番頭にも是非御客様に取成して呉れと頼んでゐる。番頭から紙と筆をもらつて三下り半ばかり認めた手紙を遣つたらば、二人の駕屋は更に三拜九拜して歸參がかなへば早速御禮に來るといつて歸つた。

繪端書のない頃で女中の持つ來た寫眞に蘆の湖の逆さ富士が湖水に蘸した景色があつた。天氣が好ければ坐ながら座敷から見えるといつたので、翌朝の晴を祈つて寢たが、雲助の前後變つた容貌が眼の前にちらついて暫くは眼ざらめぬ。フト想ひ出したのが撃退之が詩を作つて衡嶽の雲を排し、蘇東坡も詩を作つて登州蓬萊閣で屢氣樓を見たといふ傳説で、一つ箱根權現に献ずる歌でもどぬたくる中に、竹取物語か何か

の、夢ともうつゝともつかぬ空想に陥つて眠つた。

翌朝早く起きて湖面を望んだが霧深く離宮すら糢糊としてゐるので、逆もぬたでは靈驗はないとあきらめて、朝食の箸を執る時少し朝日影がさしたと思ふと女中がアレ御覽なさいといふので、見れば寫眞に見たよりもうつくしく、少し紫を帯びた山の姿が十露盤珠の如く空と水とに相映じた。ぬたは何とあつたか野帳にないが此の時には韓蘇何人ぞ我何人ぞと獨りで悦に入らざるを得なんだ。

草鞋の紐を結んで出立する時店先に昨日の駕屋二人が來て手紙の禮を述べ、何處へ行くかと問ひ、是非湯本まで駕に乗つて呉れろ、外にお禮の仕方がないと又々窮窟な駕に無理遣りに乗せられて、舊街道を無錢で大名風を吹かして通るといふ奇妙な運命になつた。籃輿夢を搖かしてといふ三樹の句を想ひ出しつゝ、彌々軍談中の武者修行豪傑を氣取つて得意の上に又た一の得意を加へた。

烟宿で返さうとしたが商賣の都合がよいとどう／＼湯本まで送られ、僅かの酒手もなか／＼手に取らず漸く恐縮して受けて行つた。これが昔の雲助の面白氣分であつたらうと思ひ出しては胸がすか／＼しく一陣の清風腋下に起るを覺える。

## 二、陸前作並溫泉

明治二十年 月 日山形縣酒田大地震の電報が東京を驚かした。濃尾震災の實況を瞥見したが當時なほ調査研究といふ頭でなかつたのを遺憾とした我輩寸刻の猶豫も出來ずに東京を飛び出して汽車で仙臺までいつた。此の時東京は秋暑が未だ除かず、冬服では熱かつたので外套も毛布も携帶せなんだ。此頃は旅行に下手な引越し位の手荷物を持つと新聞にまですつば抜かれるから今或は虚偽と疑はれるかも知れぬが年少の客氣は誰も變りなかつた。

仙臺に下車すると大雨で、漸く蝙蝠傘だけは持つてゐたが、停車場からすぐに岡山峠越えの豫定で人力車に乗つて二三里雨を胃して泊つた

雨中仙臺がすでに肌寒く山間の木賃宿で其晩寒胃にかゝつて熱が出たが、翌朝兎に角行ける處までと雨後の第三紀層の道路で泥濘深く上り坂になつた處を辿つた。其の中に急な坂道にかゝると古い人力車の悲しさに兩側の縁取つた金ガミリ／＼外れて梶棒の上で兩側の板の割れ目から車體が割れて梶棒と踏臺を車夫の手に残して二百度以上後ろへ廻轉して徐々に泥中に母衣を埋め、其の間から乗客の背中一杯に泥を印し、怪我はなかつたが一枚看板の冬服が泥塗びれになつた。

車夫は車を繩で縛つて漸く曳いたが、熱のある體で漸く車の後押しをして着いたのが作並溫泉であつた。日はまだ正午にもならぬが、身體も衣服も車と共に臺なしになつたので此處に一泊休養して風邪がなおれば峠を越えて山形に行く積りにした。然るに此の夕も熱が高いので暫く滞在する外ないといふハメに陥つた。

此の不用意な旅行の失敗は自分の一生の失敗である。こうなると未練が出るのは山形人で同

宿した後の文豪で、出發前に順路や準備のことを一寸と相談したが、文豪が日蓮の話であつたらば面白がつたのであらうが、郷里の地震などは全く風馬牛で、衣服の注意など一切聞けなんだのである。人間といふものは勝手なもので、こんなことか其後隣に宅を構へても、挨拶に來ぬから、此方も行かぬといふ風で、合壁で結婚の相談が手に取る如く聞えても交通せず、轉居後に初めて年首狀の遣り取で交通の途を開いた様な、今から考へて遺憾に堪へぬことになつた。

然かし此の時の困却苦悶は病氣よりも計畫の失敗にあつた。何となれば宿屋小さな道路に開いた窓から見ると、前内閣の水野内相が書記官で震災地に人力車で行くのが見える。造家科の同窓も人力車で行く。毎日後の鳥が先になつて行くのが恨めしい。

又た此の時の作並溫泉といへば纔かに車道が出來てはゐるが、家は舊式で便所と來ては言語同斷である。特に不便であつたのは言語の不

通で、連れた車夫と主人と言葉が分るが、家族は全くの奥州訛りでてんで此方の言葉を理會せぬ。十五六の小娘が給仕に来るが、車夫が亭主を呼ばねば一切何の用も足らぬ、内地で通譯がいったのは此の時初めての経験であつた。

二泊後に少し風氣が輕くなつたから、同じ車夫の新らしい車で關山峠へ向つて分水嶺までいったが、西に向へば日本海側はみぞれが降つてゐるのに驚いて、酒田行を斷念せざるを得ぬことになつた。尤も此の晩には又た熱が高くなつて、更に二三日靜養せねば東京に引返すことも出来ぬ容體であつた。

こう觀念して見ると病氣の爲め温泉に居て入浴が出来ぬといふ馬鹿氣た境遇ではあつたが、環境が別に一種の言ふ可らざる興味を生じて来る。山中の秋景色は朝夕晴雨の變化によつて筆舌共に之を形容の出来ぬものである。

作並は船形山（一五〇〇米）の南麓廣瀬川の上流の溪谷に在つて、地盤は第三紀凝灰岩で高處には安山岩が蔽ふてゐる。此の凝灰岩は白色の

石英粗面岩質のものらしく、流水に深く浸蝕せられて高い岩壁が出来てるが、山といはず崖といはず此の斜面に生ひ茂つた大小の樹木は此の時既に他處に先つて紅葉してゐた。

宿屋の座敷は崖の中腹に在るから、此の紅葉を上から瞰おろし、下から見あげるの、葉面に反射する光と葉を透す光とで其の紅色が一樣でない。

晴れた朝に靄を帯びた時には溪谷全體は紫色と萼色との間の色合になつて、紫靄滿溪といふべく、夕日がさせば樹の間から漏れる日光が透徹つた緋色となり、溪底の樹は朱に塗れて見える。又た日中には山々が或は黄ばみ或は朱けに染まつて遠くなるに従つて紫色に見え、針葉樹が其間に雜つて萬紅の林中に紺綠色の下地を露はす、千段萬段の綴錦が地を蔽ふた様に感ぜられる。

雨のしんみり降りそぼる時には薄暗い光が此の紅葉を包むから、古代緞子の名品の如く滋味を帯びた色になつて、琴を弾く如き溪流の響と

調和した別して閑靜な言ふ可らざる境界である  
又た晴れかゝり雨脚に日光を添えて溪間に漏れ  
て來れば、瞬間に色彩が變化して濕ふた樹葉の  
紅色が透す光にも射る光にも別の緋色となつて  
來る。

近頃南京で石渠寶笈中の明人陸包山が黃鶴山  
樵に仿ふた秋景山水の一幅を獲たが、之に對す  
るごとに誰か紫と紅と朱の色彩を自由に使ひ得  
る名手を傳ふて此の山中の秋色を寫させたらば  
と思ふ。十數年間に文展から院展帝展と派手な  
繪具が濫費されつゝまだ一度も此の如き色彩の  
真相を發揮し得ないのは恐らくは秋期展覽會を  
前にして夏の間に形管を弄するので何時も此の  
如き奇觀を捕捉する機會を持たぬと見える。

作並溫泉の秋色は今も網膜の底にこびり付い  
て三十年後に至つても思はず山中に痾を養ふた  
のを一生の幸運と感じてゐる。

### 三、和 倉

北陸の溫泉は越前三國港、蘆原<sup>あはら</sup>、粟津、片山  
津が海岸に沿ふて一線上にあつて、其の東に山

溫泉めぐりのみち草

中、山代が山手の一線上にあるらしい。我々の入  
浴したのは山中、山代のみで、十一月三日に山中  
から雪を冒して山代に行つたので、溫泉の興味  
よりも寧ろ初めて雪中の北陸を知つただけであ  
つた。其後夏の山中溫泉に二三泊して蟋蟀橋の  
溪流に涼を趁ふたのが面白かつた。

それよりも繁く入つたのは和倉で、三知壽伯  
と御殿場を甲府を経て駒ヶ嶽の北を高遠に越し  
奈良川から野麥峠を越えて乗鞍嶽に登り、越中  
富山に出て氷見の海岸を傳うて、七尾を経て和  
倉にいつたのが第二回で、日露戰爭中に夏季二  
回までいつたし、最後は君山博士を誘ふて京都  
から金澤に一泊して其頃まで圖書館に保存され  
た松雲公の蒐集した古書を一覽し、池善書店で  
古書を漁つたりして、和倉の旭館に十日の湯治  
を試みた。

此の旅行は蜂窠織炎に罹つて左腕關節を析解  
した後で、腕が屈らぬので洋服の釦ネクタイは  
旅館の女中を煩す片輪物となつて居た。日露戰  
役當時に負傷兵が此處の湯治で創傷の豫後が非



常に好成績であつたのを記憶してたので、此の屈伸不自由な身體に利くかも知れぬといふ希望を持つて行つた。

不思議といへば着いた午後直ぐに、君山子と共に一浴し、試に左の手を添えて右の肩や脛の下に右の手を屈めて見ると、入浴五分時の後には何の苦もなく意の如く着くのであつた。五月以來整形外科のM教授當時助手であつたK博士が汗を絞つてウン／＼押しても今一寸ばかりでどつちにも着くまでに屈らなんだ腕の運動が一遍に出来る様なつたのであるから、毎日三度位づゝ入浴して屈伸を續け四五日で大方自由を恢復したのは、昔ならば神佛の靈驗か耶蘇の奇蹟の中に數へたかも知れぬ。

和倉温泉は有馬池の坊の内湯に亞いで鹽氣の多い湯でM教授が温泉がよいかも知れぬとの注意が忽ち豫期以上に利きめを顯はして全く助かつた。

和倉は七尾の北三里許に在つて七尾灣に面し東に能登島が横たはり、其頃海岸を縮切つて巒

嶺を採掘したので一時有名となつた半の浦が其の對岸に見えてゐる。此の邊の第三紀層を成す砂層は殆ど全部硅質海綿の刺ばかりで、又た鯨の耳骨たる「誰が神」と「布袋石」も澤山に出た。山上には大きな板石を横へて造つた穴居の遺跡といふ古墳らしいものもある。

半島の東北小木の近傍は第三紀層の海蝕を受けた海岸の景色が奇絶と稱せられ小蒸汽で往復するのも面白い。

#### 四、硫 黄 島

硫黄島の列島は北緯二十五度線の南北に跨り回歸線に近い處にある。此の島嶼は何れも火山島であつて北南兩島共に海中から急峻な斜面を成して突起してゐるが、中間の中硫黄島だけは扁平な琵琶の形の輪廓を成した火山島で其の胴は本山といふ饅頭形の火山は浮石の堆積層で、中央に幾つも凹んだ舊火口がある。其一つは深い孔で底に硫黄を雜へた泥が溜つて、火口壁は五色の色彩を呈してゐる。一端の柄の先に當る處が突起したパイプ山であつて、遠望すれば鉤

豆煙管の火皿の如く、此處だけが熔岩の流れた小火山で火口内で硫黄を採つたことがある。平地が多いので甘蔗糖業や天日製鹽業が行はれて、此の島のみは移民が頗る多い。

相模灣から汽船で行けば八丈島父島母島を経て此の島が航路の終點になつてゐる。其の間に氣候がすん／＼變るのが著しく、黒潮の正面にぶツつかる八丈島は伊豆海岸よりも雨量が遙かに多いが小笠原は餘程減じ、中硫黄島に至れば全く寡雨の熱帶地方と同じ氣候になつて、其代りに時々驟雨が來るので、露兜樹ココヤシから其のじづくを引いて甕中に天水を貯へて僅かに飲料水とするのである。

こんな譯で湯を沸かす水などは得られぬが、幸に本山の火口の縁に一つの噴汽坑があつて、

熱い蒸汽が絶えず噴いてゐるから、住民は其上にタコノキの葉で葺いた小屋を造つて蒸汽の屋根に當つて其簷から出て來るのを身體に受けて露天の蒸汽浴をやつてゐる。又た常食に供する摩芋も地に二尺ばかりの穴を掘つて之に入れて上に草を詰めて置けば疎鬆な浮石層を透して噴出する蒸汽で天然料理 Natural Cooking が出来る杖の先で地に孔を穿つて指を入れると焼けさうに熱い。

大正元年八月の東京地學協會の旅行に行つた時の此の經驗は八十餘人の一行で島民の歡迎を受け、島の名物たる西瓜を茶の代りに一人で一顆以上を平らげて舌鼓を鳴らした連中が少なくなつた。(如舟老人)

## 中山道温泉雜記

淺間温泉

中山道温泉雜記

もう何年か前だ妙高山の中腹で正月を送り、

○

A